

横国刻々

新駅からはじまるまちづくり。



羽沢横浜国大駅
開業記念
特集!





CONTENTS

特集

MORE FUN! MORE COMFORTABLE! YOKOHAMA CITY

新駅からはじまるまちづくり。

05

FUTURE MEETING

羽沢横浜国大駅のみらい。

中村文彦 (横浜国立大学)

× 長島弘和 (相鉄ホールディングス)

× 菊地健次 (横浜市都市整備局)

09

START UP! CITY PROJECT

新駅からはじまる地域活性プロジェクト!

SIGN 街の魅力を見る化。

EVENT 地域愛を育む楽しいお祭り。

SPACE 人と触れ合う交流の場。

GOODS ときめきの限定グッズ。

11

PLANNING ARCHIVE

横国のまちづくり最前線!

15

WADABEN PROJECT

和田丸と、行く!

17

YNU NEWS

18

YNU PEOPLE

挑戦し続ける横浜国立大学の「人」。

29

ヨココク歴史ものがたり

白亜の殿堂 編

33

YNU FES

清陵祭

34

YNU FES

常盤祭

今回の『横国刻々』は、2019年11月30日に開業した「羽沢横浜国大駅」にスポットを当てています。

横浜国大の名前がついた新駅の開業に際し、大学がどのようなことを考えているか、鉄道会社や地域、行政と連携してどのようなまちづくりを進めているのかを紹介します。駅周辺で着々と進められている大学と地域との連携活動についても知っていただき、さまざまな可能性を想像していただければと思います。また、レギュラーコンテンツとして、教員・学生紹介を通して本学の現在を、マンガを通して本学の歴史をひもとくコーナーも用意しました。是非ゆっくり、じっくりとお楽しみください。

広報委員会 委員長(理事・副学長)

根上 生也

横浜国立大学 卒業生・基金室

横浜国立大学では、教育・研究の発展の為、広く寄附を受け付けております。ご相談・詳細につきましては、右記のQRコードよりご確認ください。

TEL 045-339-4443 FAX 045-339-3034



アンケートのお願い

『横国刻々』のより充実した誌面づくりのために、ぜひWEBアンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにご協力いただき、ご応募された方の中から、抽選で5名に「YNUサブレ&クッキー」をプレゼントいたします。当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。

応募締切:2020年8月31日(月) ご回答方法:WEBにてご回答ください。右記のQRコードよりアクセスできます。



横浜国立大学広報誌
横国刻々 第4号
2020年3月31日 発行

編集・発行
国立大学法人横浜国立大学 広報委員会
〒240-8501
横浜市保土ヶ谷区常盤台 79番1号

編集ディレクション
立古和智、松本友也 (fridge Inc.)

編集・執筆
吉田健二 (fridge Inc.)

撮影
榊 智朗

アートディレクション
江原レン (mashroom design)

デザイン
武田孝太、高橋紗季、田口ひかり
(mashroom design)

製本印刷
株式会社 八紘美術

お問い合わせ
横浜国立大学
総務企画部 学長室 広報・渉外係
TEL 045-339-3016
FAX 045-339-3179
URL www.ynu.ac.jp

MORE FUN! MORE COMFORTABLE! YOKOHAMA CITY

新駅からはじまるまちづくり。

昨年11月に開業した「羽沢横浜国大駅」。

その名のとおり、横浜国立大学と深い結びつきを持つ新駅の誕生は、羽沢地区にさらなる発展を促すだろう。

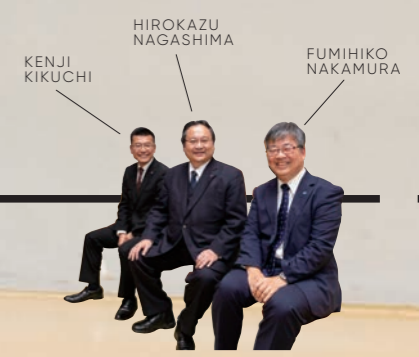
企業、行政、地域と大学との連携がより一層深まった先には、どんな「まち」が生まれるのか。「地域連携活動」を振り返りながら、その可能性を探った。

New station!
横国近くに新駅が誕生!

横浜国大の学生が持つユニークで柔軟な発想を、まちづくりに生かしたい。
横浜国立大学副学長
中村 文彦

誰もがハッピーになれるまちづくりを、地域の人々とともに。
横浜市都市整備局
菊地 健次

羽沢地区がもつ独自の魅力を、この駅から発信します。
相鉄ホールディングス株式会社
経営戦略室沿線まちづくり担当
長島 弘和



MORE FUN!
MORE COMFORTABLE!
YOKOHAMA CITY

01

FUTURE MEETING

羽沢横浜国大駅のみらい。

羽沢横浜国大駅の開業をきっかけに、大学、相鉄グループ、横浜市が連携を深めている。豊かな緑に囲まれた羽沢地区を、今後どのように盛り上げていくのか？
代表者 3 名による座談会を通じて、目指すべきまちづくりのカタチを探っていく。

Q.街づくりに大切なことって、なんですか？

中村 文彦 × 長島 弘和 × 菊地 健次
横浜国立大学 × 相鉄ホールディングス × 横浜市都市整備局

まちづくりの基本は「人」。あらゆる人の声が集まる交流の場としての新駅を。

菊地 横浜市としては、新駅誕生をきっかけに、横浜国大生や地域の方々との連携を深めたいと考えています。実は、私自身も羽沢地区で生まれ育った地域住民のひとり。その実感から批判を恐れずに言わせてもらおうと、

この地域は「高速道路や新幹線の通過点」と思われがちで、これまでは少し存在感が弱かったと思います。今回の羽沢横浜国大駅のオープンが、こうした状況に風穴を開ける起爆剤になるのではないかと期待しています。
長島 地域課題の解決は、私たち企業や行政だけで取り組んでもうまくいきません。独りよがりなまちづくりを避けるには、地域に暮らす方々と具体的な施策についてし

っかりと議論を重ね、協力を仰ぐ必要があります。もちろん、一朝一夕にはいきませんが、まずは新駅をコミュニケーションの場として活用して、議論の前提となる信頼関係を醸成していければと思います。
中村 私たち大学も、地域の方々とのつながりを大切にしたいと常に考えてきました。「この地域に横浜国立大学があってよかった」と思ってもらいたいですし、学生たち

にも「この街で学べてよかった」と感じてもらいたい。それに学生は、地域の人々と、行政や企業とを橋渡しする仲介役となる可能性を秘めています。大学の存在が、まちづくりにポジティブな影響を与えることを証明するためにも、積極的に地域との交流の場を設けていきたいですね。
長島 新駅と大学という、ふたつのフレッシュな要素をうまく生かせば、この街に新

たな風を吹き込めるはずですよ。高齢化が進んだ地域での新たな街づくりのモデルケースにもなるかもしれません。東急電鉄との接続が始まる 2022 年度下期までに、駅周辺をどれだけ盛り上げられるかが勝負です。
中村 「羽沢横浜国大駅」自体を大規模に発展させるというよりは、周辺の地域を巻き込んで独自のカラーを打ち出していきたいですね。開発されたばかりの新しい市街地もあ

れば、昔ながらの古き良き集落もある。別の土地からやってきた学生もいれば、何世代も前からこの土地で暮らす人もいます。そんな多様性が生み出す相乗効果に期待したいです。
農地や豊かな自然。羽沢地区の大切な資源を進化させる試みを。
菊地 「自然の豊かさ」も羽沢地区の特徴

01

のひとつです。今も農地をはじめ、たくさんの緑が残されています。これを有効利用しない手はありません。一方で、日本の農地や緑地、樹林地というのは税制が非常に複雑で、うまく管理・継承ができずに放棄されてしまうケースも少なくありません。手をこまねていけば失われてしまう自然を、どのように活用するか。今後ますます無視できない課題になると考えています。

長島 たしかに、新駅の誕生によって住環境や利便性は自ずと向上するでしょうから、自然資源を意識的に保全・活用する試みの重要性が増してきそうですね。横浜の中心地や東京からそれなりに近い位置にありながら、豊かな緑が残っている羽沢地区が、どのように環境を保全し、まちづくりに生かしていくのか。今後、相鉄沿線全体で「都市や郊外における自然資源の活用」を考えていく上でも、貴重な先行事例となりそうです。

菊地 自然資源のなかでも重要なのが「農地の活用」です。今までは「農地を維持する」という意識でしたが、それでは少し甘かったのかもしれない。むしろ、「農地を進化させる」くらいの意識でプランを練らなければ、有効活用には至らないと考えています。横浜農協が商標登録した「浜なし」という梨のブランドがありますが、こうしたブランド農産物を羽沢地区でも開発できれば、農業が盛り上がり、結果的に農地の保全にもつながるでしょう。これはあくまで一例ですが、大学とも連携しながら新たなアイデアを探っていききたいですね。

中村 横浜国立大学に農学部はありませんが、経済学部には農業に注目している教員

や学生がたくさんいます。彼らは、農作物と人と街をつなげるためのアイデアを日々模索しています。地域連携活動のひとつ、「アグリッジプロジェクト」(本誌p.11)はその好例です。まちづくりというと、都市機能やコミュニティスペースについての議論が想起されがちですが、農地との調和も意識すると、羽沢地区らしいまちづくりができるのではないかと思います。

長島 先ほどお話を挙がった「浜なし」は、対外的なPRだけでなく、地産地消に力を入れていることも有名ですね。青果店やスーパーなどに出回ることはめったになく、主に農家の庭先や直売所で販売されていると聞きました。せっかく人の集まる駅ができるのだから、野菜の直売所を設けるなどして、地産地消の流れも後押ししたいです。

実験場としての新駅。 授業で学んだ知識を、 まちづくりの実践で活かす。

菊地 新しいチャレンジができる「余白」が残されていることも、羽沢地区の魅力ではないでしょうか。「新駅がオープンしたのはいいけれど、駅前はまだまだ寂しい」という声も聞こえてきますが、私はそれはむしろチャンスだと捉えています。今こそまさに、みんなでアイデアを出しあいながら、誰もがハッピーになれるまちづくりを目指すべきときです。

長島 地域の「伝統」さえ、これから形にしていく段階ですね。たとえば、学生と地域、鉄道会社が連携して、お祭りを始めるというのはどうでしょうか。そこから後に地域の財産となる行事や風習が生まれるかもしれません。イチから作り上げられる

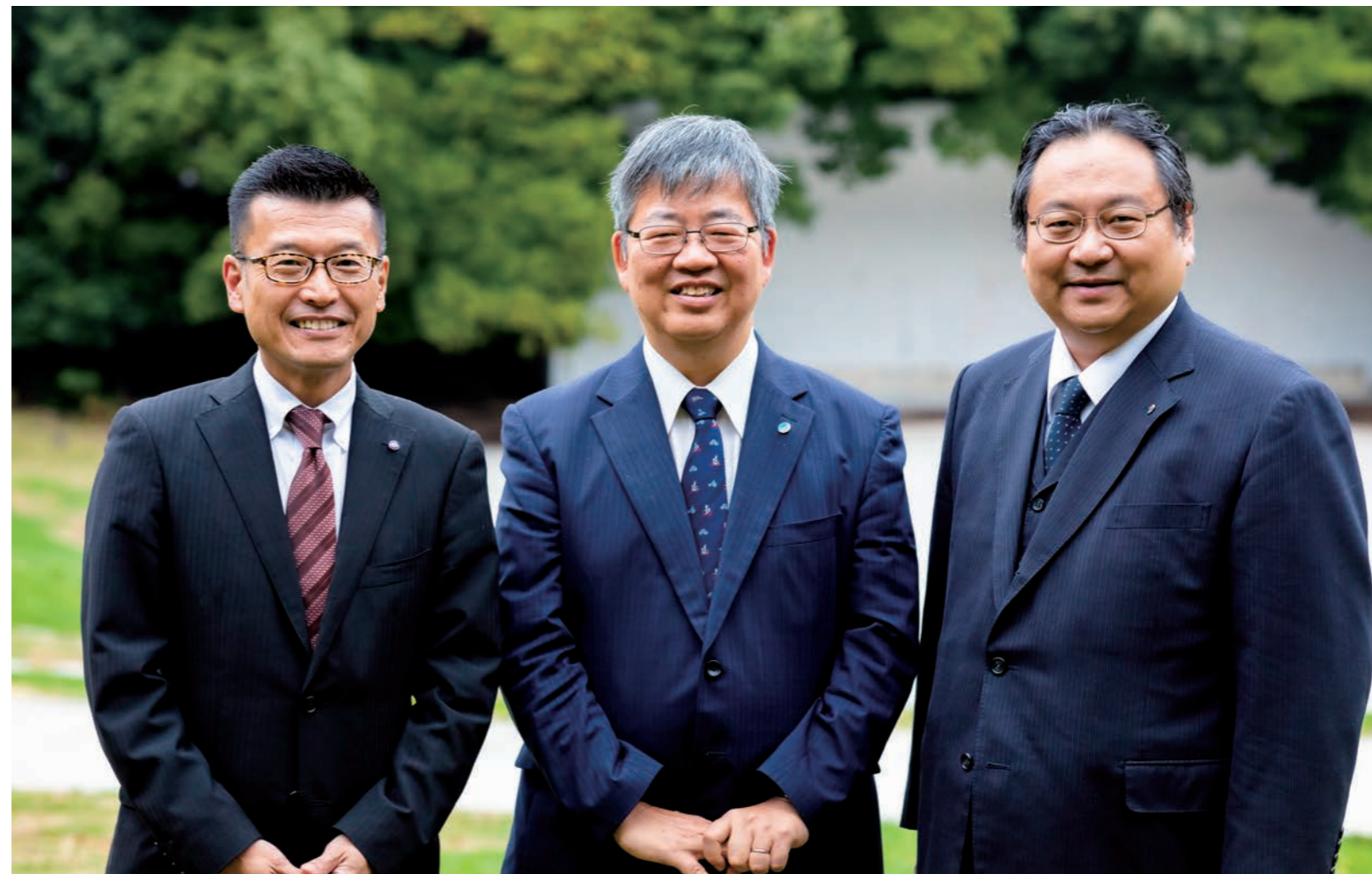
からこそ、地域に新たに居住する学生たちも、自分ごととしてまちづくりに取り組めるはず。そこから地域愛も生まれるでしょう。もっと街を良くしたいという思いが生まれれば、課題を見つけ出し、それを解決するというプロセスにも自ずと身が入るはず。大学の教室で得た学びを実地で試す場として、地域全体が彼らの第二のキャンパスになれば理想的です。

中村 まずは学生が主体となって新駅を気づけていけると理想的ですね。何もない今だからこそ、学生たちもどんどん失敗できる。空きスペースを有効活用するアイデアを学生たちから募り、学長たちのお墨付きを与えて1ヶ月自由に使わせるなど、大学側も大胆に背中を押してあげたいですね。「若者が集まって、何やら盛り上がっている」というイメージができれば、企業などの注目度も高まるはず。そうすれば学外の若者も、駅周辺に集まってくるでしょう。そうした循環から、にぎやかで独自性のある街が生まれたら素晴らしいと思います。

若いアイデアを活かし 話題性と利便性を備えた 未来の街づくりへ。

菊地 相互交流は学生のみならず、行政にとっても大きなメリットがあります。大学生は、地域の「中の人」でもあり「外の人」でもある中間的な存在です。地域に深く関わりながらも、一利用者としての素朴な視点も持っている。だからこそ、我々では気づかないユニークなアイデアを出してくれます。

長島 私たち相鉄グループも、新駅をきっかけに横浜国立大学との連携を強化できる



ことに大きな可能性を感じています。そもそも私たち民間企業にとって、最先端のトレンドを掴むアンテナに優れた学生たちの生の声は大変貴重なものです。プロジェクトを通じて長期的に関わるとなれば、若い感性を生かしたユニークなアイデアも提供してもらえます。実際に、いずみ野線沿線で行っている「次代のまちづくり」プロジェクトでも、横浜国大の学生さんたちの柔軟な発想には毎回驚かされてばかり。「車

庫などの遊休地を活用したコミュニケーションスペースの設置」など、斬新なアイデアにも目を見張ります。こうした連携は、今後もぜひとも深めていきたいですね。

中村 横浜国立大学は、これまでさまざまな地域のプロジェクトに参画し、自分たちが持っている知的財産を提供してきました。そして今回、羽沢横浜国大駅の開業を機に、相鉄グループ、横浜市との連携を強化することになったわけですが

ら、羽沢地区の活性化にも私たちの知識や経験を惜しみなく発揮していきたいと考えています。羽沢地区のすぐ近くで大学を運営しているからこそ、このエリアをより魅力的な場所に変わっていきたく。周辺地域だけでなく、沿線エリアまで視野を広げて、私たちの力を還元していくことが大学の役割です。実際にアイデアをカタチにできるこの場所を、学生たちにも有効活用してもらいたいですね。

中村 文彦

横浜国立大学教授・副学長(国際・地域担当) / 地域連携推進機構長。「『先進性、実践性、開放性、国際性』といった大学の理念上でも、今回の地域との連携強化は、『横浜国立大学』の前進にも繋がります。地域内で多様なチャレンジを実践できることは、学生にとって大きなメリットです！」



長島 弘和

相鉄ホールディングス株式会社経営戦略室沿線まちづくり担当部長。「共同リサーチやイベント企画の提案など、学生のみならずが主体となって動いてくれていることに感謝します。今後も『横浜国立大学』発の企画に期待しています。一緒にプロジェクトを企画していきましょう！」



菊地 健次

横浜市都市整備局都心再生部長。「駅名に『横浜国大』と入ったのは大きいですね。若者の斬新なアイデアがまちづくりに活かされれば、自然と話題にもなります。横浜国大のみならずとのコラボレーションで、地域の特性を生かして何が生まれるのか、今から楽しみでなりません！」



DESIGN BRAND UP PROJECT

「安全・安心・エレガント」を体現するデザインリニューアル。

創立100周年を機に、「デザインブランドアッププロジェクト」と称して駅舎や車両、制服などのデザインを大幅に刷新した相模鉄道。「くまモン」を手掛けたデザイナー・水野学氏と、丹青社のエグゼクティブクリエイティブディレクター・洪恒夫氏を迎えて実施したりリニューアルは、社内外から好評を博した。2019年には念願の都心直通運転を実現。3年後の東急線直通開始に向け、さらなる発展を目指す。「今後は、駅周辺のまちづくりに学生のアイデアが反映される可能性もあるかもしれません」と長島さんは語る。



START UP! CITY PROJECT

新駅からはじまる 地域活性プロジェクト!

イベントの企画から限定グッズの発売まで、
新駅開業をきっかけに動き始めた数々のプロジェクト。
取り組みの一端をここで紹介したい。



SIGN
—
街の魅力を
見える化。

**バリアフリー×地域ガイド。
街全体を使って情報発信!**

活気ある街を目指す活動の端緒として、
昨年末から始まった「サイン化計画」。地
域の方々から街の情報を集めて制作した案
内板や地図は、交通量の多い場所や、傾斜

の激しい坂道に注意喚起することでバリア
フリーに貢献。同時に街の歴史や魅力も発
信することで、地域ガイドとしての役割も
果たしている。キャンパスを囲む外壁も立
派な発信ツールのひとつ。壁一面に小学生
の描いた絵や住民の撮影した写真を展示す
る「街中ギャラリー」計画が進行中だ。

YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY



野菜の直売所や、大学の歴史を掲載した
マップを制作。掲示板に貼り出している。

来場者約1万人、
駅発のローカルイベント、
ハザコクフェスタ。



昨年11月30日、相
鉄グループと沿線住民が
「羽沢横浜国大駅」の開
業をともに祝福する「ハ
ザコクフェスタ」が開催
された。開業記念式典で長谷部勇一学長が
関係者とともにテープカットを行い、トー
クライブでは学長補佐の高見沢実教授が登
壇。地元で採れた新鮮な野菜、生花、加工
品を販売する「ハザコクマルシェ」や、企
業・団体によるPRブースも開設された。
羽沢地区の今後の盛り上がりを想像させる
老若男女が楽しめるイベントとなった。

「アグリジブプロジェクト」のビールや「みなとまちブ
ロジェクト」のオーガニック緑茶など、地域連携活動
から生まれたコラボ商品がブースに並んだ。

EVENT
—
地域愛を育む
楽しいお祭り。

SPACE
—
人と触れ合う
交流の場。

羽沢地区の住民
たちとの意見交換
を活性化すべく、
新駅開業前から公
開講座や講演会を
定期的開催。大
学における地域連携活動の報告を行うほか、
行政や民間企業の担当者も登壇するパネルデ
ィスカッションによって双方向的な対話を目
指す。ここから生まれたアイデアや指針が、
これからのまちづくりの基盤となる。



地域、大学、企業が
意見交換できる
コミュニケーションの
場づくり。

「そうにゃん×横浜国大」
コラボグッズ



新駅の開業を記念し、
相模鉄道のマスコットキ
ャラクター「そうにゃん」
と本学との限定コラボグ
ッズを開発。駅の看板を
模したフェイスタオルや、本学のシンボルマ
ークをリボンにデザインしたキーホルダーな
ど、全4種のアイテムを生協などで発売。
※現在は売り切れのため、取り扱いなし。

GOODS
—
ときめきの
限定グッズ。

MORE FUN!
MORE COMFORTABLE!
YOKOHAMA CITY

03

PLANNING ARCHIVE

横国のまちづくり最前線!

自治体や企業、地域の方々と連携しながら、独自のプロジェクトに取り組む「地域連携活動」。数あるプロジェクトから、代表して6つを紹介する。



チョイモビヨコハマ

日産、横浜市が協働で実証実験に取り組んでいる、専用の超小型モビリティを活用したカーシェアリングサービス。実習では、大学や地域周辺での利用をさまざまな角度から検討する。

Archive

01



Archive

02

みなまきラボ

南万騎が原駅前に立ち上げられた、公民連携のまちづくり拠点。「みなまきピクニック」や「みなまき寺子屋」などの交流企画を運営するほか、周辺地域の商店街とも協働でイベントを実施した。



さまざまな専攻の学生たちが、共通の目的のもとで活動に励む。

農業空間の活用、さまざまな世代の住民との交流、学生と地域住民とで行うワークショップなど、大学周辺を中心として、さまざまなアプローチでまちづくりを行っている「地域課題実習」。プロジェクトごとに活動内容は異なるものの、少しでもこのエリアに貢献したいという学生の思いは共通している。異なる視点を持った学生たちが、学部や学年の垣根を超えて意見を交換。それぞれの活動を盛り上げている。

日産グループとの共同プロジェクト「チョイモビヨコハマ」には、都市科学部、理工学部、経済学部の学生が参画。次世代電気自動車を導入し、交通の利便性向上を目指している。現在は「羽沢横浜国大駅」開業を機に、羽沢エリアへの「チョイモビヨコハマ」導入に注力。誰もがより気軽に街を回遊できる交通インフラを構築する

ことで、地域内のコミュニケーションはさらに活性化し、街にはにぎわいが生まれる。

ひとつのプログラム内に留まらず、他の地域課題実習プロジェクトや地域住民・専門家などとも連携しているのが「みなまきラボ」だ。高齢化が進む南万騎が原駅周辺の住宅地にイベント拠点を設けることで、地域住民と外部の人間との交流を生み出している。これまでには、映画観賞会やひなまつりなどのイベントに関わった実績がある。

農業で地域経済の活性化を目指す「アグリッジプロジェクト」では、全学部から集まった学生が連携し、事業プランを考案。キャンパスが学外にも開かれている横浜国大の特性を活かし、大学内や地域のコミュニティハウスにて、近隣で栽培された野菜を教職員や地域住民に提供している。その他にも、土を使わずにペットボトルで栽培する「ペット野菜」の普及活動も行っている。新たな農業の形が、地域の人々の共感を集めている。

Archive

03

アグリッジプロジェクト

羽沢周辺地域の農家や企業の方々とともに、商品開発やイベントの企画を行うプロジェクト。経済活性化、コミュニティづくり、技術開発の3つの視点から、新しい農業スタイルの確立を目指す。





サコラボ

『左近山団地をふるさとにしよう』をテーマに、URや横浜市と連携し、地域活性化に取り組んでいる。人気の企画は、家具や食べ物を持ち寄り、学生と地域の人がともに寛ぐ「サコメシ」。

Archive

04



幅広い世代の人と学生が交流し 元気のある街を作っていく。

高齢化の進む地域では、住民と学生の交流促進を目的とした実習も高い効果をあげている。目指すのは、安心・安全だけでなく、より活気ある街をつくることだ。その中でも、多世代が共存・交流できるまちづくりを目標に活動している「サコラボ」は、実際に学生たちが現地に住み込み、地域の人とコミュニティを形成しているユニークな取り組みだ。活動が始まった当初は「大学生と高齢者がトラブルなくコミュニケーションを取れるのか」といった不安の声もあがったものの、イベントやNPO活動を手伝う学生たちの姿を見て、住民の方々も少しずつ彼らを受け入れていった。「左近山をふるさとにしよう」というコンセプトそのままに、多世代が交流する街を目指して日夜イベントの企画に励んでいる。

一方、保土ヶ谷区の児童との交流を目的に活動してい

るのが「がやっこ探検隊」だ。プロジェクト発足のきっかけは「小学生に楽しい思い出を提供したい」という保土ヶ谷区役所からの相談だった。今では80名の児童が、1〜2ヵ月ごとに学内で催されるゲーム企画やキャンプなどに参加する。教育に関心のある学生たちにとっては、実地で学びを深める絶好の機会だ。

「常盤台まちづくり応援団」では、高齢者とのワークショップを定期的開催。学生がファシリテーターを務めることで、地域住民もフラットに意見を出しやすくなり、見えづらいニーズや課題が浮かび上がってくる。目指すゴールは、バリアフリーの視点から高齢者の住みやすいまちづくりを行うこと。「住みやすさ」のなかには、単純な利便性だけでなく、住民同士の良好なコミュニケーションや地域への愛着などの心理的な要素も含まれる。真に住みやすい地域づくりに貢献するべく、まち歩き企画などの交流イベントも開催している。



Archive

05

がやっこ探検隊

保土ヶ谷区内の小学生80名と学生たちが交流を深めるプログラム。キャンパス内で行うクイズや工作イベントのほか、お祭りへの出店やキャンプなど、さまざまなイベントを学生が企画する。



常盤台まちづくり応援団

地域の方々とワークショップを行い、地域課題を解決していくプログラム。これまでには、街なかのバリアフリーを徹底的に見直す「まち歩き点検」やウォーキングマップ制作などに取り組んだ。

Archive

06



地域というフィールドで養う、 ハイレベルな専門性と柔軟性。

開学当初から、横浜国立大学は座学で得た知識を実践で試す“実学”を重視してきました。地域課題実習は、まさにその校風を体現するプログラムです。とはいっても、ただ現場に出るだけでは意味がありません。経済、建築、工学、教育など、学生たちが普段学んでいる専攻分野の視点から、現実の地域課題を捉えることが重要になります。大学の外に出れば、予期せぬ問題にも直面するでしょう。農業を始めたいけどスペースがない、イベ

ントを開催したいけど許可が下りない、など。そうした問題を乗り越えるための試行錯誤を通じて、高い専門性と柔軟な発想力の両方が養えるのではないのでしょうか。

こうした力を身につける上で、周辺地域の方々との距離が近い本学の環境は非常に恵まれています。商店街組合や自治会などに気兼ねなく参加できる上に、最近では大学を中心とした新たなコミュニティも誕生しています。実際に自分たちと関わりの深い地域だからこそ、学生たちも「本当にこの活動は地域のニーズを満たしているのだろうか」と本気で考えます。質の高い活動は、こうした環境があつてこそ可能になるのです。

高見沢 実

たかみざわ・みのる

大学院都市イノベーション研究院教授
都市計画制度、組織、プランなどのシステム構築と運用、まちづくり、住環境・市街地整備などを研究。



アグリッジプロジェクトが中心となり、企業とコラボレーションして作成したハマノワビール(左)と梅ジュレ(右)

和田町商店街を一緒に盛り上げるわだっ



おすすめは、ボリューム満点なチキンカツ弁当、からあげ弁当!



2003年にオープンしたお弁当屋「ひまわり亭」。お手頃価格のお惣菜が大人気で、地域の方からの支持も厚い。

カレー弁当には、ナンとライスが入ってるわだっ



ネバールの家庭料理を楽しめる「あえら」。本格カレーだけでなく、チャーハンも絶品。

新入部員を募集中だわだっ



和田丸
走るのが速くて、会話の語尾には「わだ」とつきがち。商店街には「和田丸ポスト」も。

MORE FUN!
MORE COMFORTABLE!
YOKOHAMA CITY

04

WADABEN PROJECT

和田丸と、行く!

学内での弁当販売や、ゆるキャラ「和田丸」によるPRで商店街を盛り上げる「和田べんプロジェクト」。街に活気をもたらすべく、和田丸は今日も商店街へとやってくる。

和田町商店街のゆるキャラ 和田丸でーす。

むっくりとした愛らしい体型で、手には三色団子。お地藏さんをモデルにしているものの厳かな感じはなく、どこかほのぼのとした雰囲気をもとう。商店街を歩いているだけでも、かけられるのは黄色い歓声というより、「おーい」「ねえねえ」というフランクな声。和田町商店街の名物キャラクター「和田丸」は、今日も程よく街に溶けこんでいる(彼を見かけるとちょっとラッキーな気分になる、とはお団子屋さんの談)。「和田町のゆるキャラ、和田丸です!」と声を張る学生たちと一緒に商店街を歩けば、小さい子供たちから手を振られ、商店街の人た

というフランクな声。和田町商店街の名物キャラクター「和田丸」は、今日も程よく街に溶けこんでいる(彼を見かけるとちょっとラッキーな気分になる、とはお団子屋さんの談)。「和田町のゆるキャラ、和田丸です!」と声を張る学生たちと一緒に商店街を歩けば、小さい子供たちから手を振られ、商店街の人た

ちからは「久しぶりだね」なんて声をかけられていた(お弁当の差し入れもちゃっかりゲットしていた様子)。

そんな和田丸も、イベントになれば大活躍。和田べんプロジェクト代表の鈴木さんはこう語る。「和田町商店街が切り盛りしているお祭りには、たいいて和田丸と一緒に参加しています。名物行事として地域の人たちに親しまれている『地藏まつり』や、それぞれのお店が一押し商品販売する『べっぴんマーケット』でも、和田丸は大人気。いろんなブースに顔を出したり、子供たちと一緒に絵を描いたりで大忙しです。和田町の活性化に繋がるならば、きっとどこへでも

やって来る。持ち前のゆる〜い雰囲気でも、いつでもほっこりした気分させてくれる和田丸。彼はこの和田町商店街にとって、唯一無二の愛されキャラなのだ。

商店街の味を大学に! お得なコラボ弁当を販売!

理工学部講義棟Aの1階で販売されているのは、出来たてほかほか、ボリュームも文句なしの商店街コラボ弁当。出店しているのは、品揃えもばっちりの「ひまわり亭」と手作り本格カレーを楽しめる「あえら」。どのお弁当もワンコインでおさまるのが嬉しい。「大学と和田町商店街を繋ぐため、2005年頃からコラボ弁当を始めました。お店の方とプロジェクトの学生と一緒に販売しています。お昼休みには、学生たちがずらーと列を作ってくれます!」

この前、ついにTVデビューしたわだっ



いつもありがとうございます! ございます!



リピート率も高いこの弁当。すぐに売り切れてしまうため、授業が終わると急いで並ぶ人たちの姿も。

この量、みんなは、べろっと食べられるわだっ?



「ひまわり亭」のお弁当。おかずがいっぱい入っていて、食べ応えもばっちり。目指せ、全種類制覇!



「あえら」のお兄さん。冬でも温かいカレーを届けられるよう、しっかり保温した状態で販売している。

せーんぶ500円以下だわだっ



お弁当販売には、学生たちも参加。どのお弁当にしようか、もし迷ったら彼らに おすすめを聞いてみよう。

YNU NEWS

Vol.
04

横浜国立大学の最新ニュース

NEWS

1

東京オリンピック/パラリンピック
体験イベントを開催しました

2019年11月17日、本学体育館および大学会館にて「横浜国立大学 東京オリンピック/パラリンピック 体験イベント」を開催しました。

企画運営は、本学講師の高野陽介先生と教育学部の有志学生たち。本学附属小学校、附属特別支援学校の児童をはじめ、地域の子もたちや保護者が約100名ほど参加しました。ゲストの車椅子ラグビー選手やボッチャ選手たちと一緒にそれらの競技に取り組んだほか、「障がい」について考えるワークショップも実施しました。

参加した児童からは「ボッチャも車いすラグビーも面白かった。パラリンピックが楽しみになった」、保護者からは「障がいのある方が、明るく前向きにスポーツに取り組んでいる姿を子どもに見せられてよかった」という声が寄せられました。



NEWS

2

横浜マリノスより人工芝・夜間
照明設備を寄贈いただきました

2007年より本学と提携を結ぶ横浜マリノス株式会社より、本学フットボール場に人工芝および夜間照明設備を寄贈いただきました。

この人工芝を本学と横浜マリノスの交流・連携のシンボルとし、両者のさらなる発展を目指します。なお2019年7月23日には、フットボール場完成記念式典が行われ、テープカットや記念試合が挙行されました。

NEWS

3

スポーツ
チャンバラ

翔剣会世界大会 結果

2019年10月3日に駒沢オリンピック公園総合運動場で行われた第44回世界選手権大会において、以下2名が、日頃の練習の成果を十分に発揮し、強豪のひしめく段において見事入賞を果たしました。

- ・三宅佑紀(4年) オープン二段小太刀 優勝
- ・神崎黎(3年) オープン初段小太刀 準優勝

また、李孝範(4年)が国別対抗戦に韓国代表として出場し、第3位を獲得しました。



NEWS

4

工学研究院・北村圭一准教授が、平成31年度科学技術
分野の文部科学大臣表彰で「若手科学者賞」を受賞

文部科学省は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者を「科学技術分野の文部科学大臣表彰」として顕彰しています。2019年4月9日、平成31年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定し、本学大学院工学研究院の北村圭一准教授が若手科学者賞を受賞しました。

若手科学者賞とは、萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた40歳未満の若手研究者が対象となり、応募者数304名の中から99名が受賞

者として選ばれたものです。

北村准教授の業績名は「国産ロケット開発に資する安定で正確な流体計算法の研究」で、一般社団法人日本航空宇宙学会の推薦を受けての受賞となりました。



平成三十一年度
科学技術分野の
文部科学大臣表彰
表彰式
文部科学省

YNU PEOPLE

挑戦し続ける横浜国立大学の「人」。

横国が誇る研究者をクローズアップする、〈YNU MAESTRO〉。

学生たちのベンチャー精神に迫る、〈VENTURE SPIRIT〉。

インタビューを通じて、横国の“今”をお届けする。



YNU PEOPLE

YNU PEOPLE

人体に眠る見えない能力を可視化し 医療福祉技術をアップデートする。

大学院工学研究院 准教授

島 圭介

Keisuke Shima

*This is your life.
Not a dress rehearsal.*



YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

姿勢を安定させる身体機能 “ライトタッチ”の応用

「人間には、まだ解明できていない神秘的な仕組みがたくさん眠っています」と話す島先生。この身体機能の謎を解き明かすために、これまで脳波、筋電位、バイタルサインなど、人間が無意識に発するさまざまな生体信号を研究してきた。

近年注目しているのが、“ライトタッチ”という身体機能。指先が軽く何かに触れているだけで、自然と姿勢が安定するという不思議な現象で、目隠しをして片足立ちの不安定な状態だったとしても、指先に何らかの感触がありさえすれば、なぜかバランスが保てるそうだ。

「カーテンに触れるとか、風船についた紐を持つとか、支えにはならないような些細な感触があるだけでも、人の転倒率は大幅に減少します。高齢化が進んでいる日本では、日常生活や仕事現場などで起こる転倒事故が大きな問題です。その解決策として、ライトタッチの解明が一役買うのではないかと期待しています」

島先生は、この現象を応用した技術の開発に取り組んでいる。たとえば、指先で何かに触れている感触を仮想的に再現するデバイスだ。指輪のようにはめておくだけで、高所作業での事故や、高齢者の転倒を予防できる。また、同じ原理で姿勢のふらつきを誘発する装置を作れば、それはそのまま姿勢の安定性を評価する検診技術にもなる。島先生は実際に、個人個人のバランス感覚を測る「立位年齢™」という指標を新たに考案。民間

企業や高齢者福祉施設で膨大なデータを収集し、医療や産業の現場での活用を目指して研究を進めている。

AI技術の応用で 検診の世界を進化させる

島先生が扱う生体信号・身体機能は多岐にわたる。これまでも、研究成果を応用し、パーキンソン病、脳性麻痺、発達障害などの早期発見に繋がる診断支援の方法を医療現場に提案してきた。

「医療現場はまだアナログ中心。検診に関しても、専門医の“優れた眼”を通さなければ最終的な判断ができない病気が数多くあります。私が目指しているのは、AIによって専門医並みの精度をもった検診支援プログラムをつくること。たとえば、乳幼児の動作や注意機能を計測し、脳性まひや発達障がいリスクの有無を独自のAIで評価する仕組みを開発しました」

島先生の研究室のスローガンは「世界中の検診を進化させる」こと。ライトタッチのような人体の謎めいた機能も、専門医の高度な判断技術も、人体に眠る見えない力という意味では共通している。その力を研究によって解明できれば、診断や予防に応用し、社会や現場をサポートできる。ここで生まれた研究成果から、いずれ人々の生活を変えるような技術が生まれるかもしれない。

今を生きる人々を支えるため、 専門知と現場をつなぐ研究を。

基礎研究と技術開発を往復する島先生

の研究の原動力は、「身体の不思議を解明したい」という純粋な好奇心と「社会の役に立ちたい」という使命感だ。現場の声を拾い上げながら課題解決に取り組む姿勢は、研究に興味を持ち始めた学生時代に、当時の恩師から教わったという。

「先生は『どんなに素晴らしい研究をしていても、人に伝わらなければ意味がない』という研究の基本姿勢を教えてくださいました。研究者はしばしば自分の関心事に没頭してしまい、社会や現場のニーズから離れていきがちです。AIや工学の分野でも、テクノロジーのことで頭がいっぱいになり、それを活用する人々の顔が見えなくなることがよくあります」

独りよがりの研究にならないよう、医療や福祉、産業などの現場と二人三脚で研究することを心がけている島先生。自分の研究分野の常識に囚われすぎないために、他分野の研究者と関わりながら研究を進めることも重要なのだという。

「最近では、経済学や教育学など、社会や人間に関わる分野の先生と共同で研究に取り組むことも増えてきました。つくづく思うのは、研究は一人ではできないということです。サポートしてくれる方々への感謝を忘れずに、社会に役立つ技術を生み出していければと思っています」

PROFILE

徳島県徳島市出身。専門は、生体医工学、リハビリテーション科学、生体信号解析、パターン認識。学生時代は「面白いゲームを開発したい」というモチベーションから、情報工学系を専攻。在学中、恩師との出会いを機に「AI、ロボット、人間支援研究で、世の中に貢献したい」という思いを抱き、現在の研究テーマに出会う。

3 KEYWORDS

島先生をひもとく3つのキーワード

1



自作のマスコットキャラクター。

3Dプリンターで制作した、真っ黒なマスコットキャラクター。島先生が自らの手でデザインしたそうだ。人間のようなシルエットながら、左手だけロボットらしくなっているところもチャームポイント。研究室のWebサイトにも使用されている。

2



一見、遊具に見えるけれど……?

研究室には、ダーツやドライビングシミュレータなど、一見遊び道具のようにも見えるものが置かれている。もちろん、これらも立派な研究用の備品。一体何に使うのか……気になる人は一度島研究室へ足を運んでみては？

3



同志でもあり、
家族でもある学生たち。

研究室の学生を、名前でなく名前で呼ぶようにしている島先生。ゼミ生が自主性や協調性を身に付けられるよう、学生だけのミーティングも行っている。何より大切にしているのは、自分たちが心から「面白い!」と思える研究をすること。

障害を受け入れられる環境づくりで はじめて本当の多様性が実現する。

大学院教育学研究科 教授

泉 真由子

Mayuko Izumi

*Life is what
you make it.*



YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

「障害理解」だけでは不十分 共生社会の実現の鍵は「障害受容」

障害や病気をもつ子どもたちと健常な子どもたちが、共に学び、共に育っていくためには、どうしたらいいのか。泉先生の研究テーマは、多様性を尊重する環境づくりに取り組む教育現場の切実な声から生まれた。

「現在の教育現場では、健常者の障害者への理解を促す『障害理解教育』だけに力点を置いているように思えます。もちろんそれも大事ですが、障害や病気のある子どもたちが自分のそれらを前向きに受け入れる『障害受容』の感覚を涵養することも必要です」と泉先生は話す。

「子どもが自身の障害等を前向きにとらえることができるような環境や集団、機会を、周囲の大人がどのように用意していくか、これが研究テーマの大きな柱です」

自分の障害等を肯定的に受け止める姿勢が、周囲の子どもたちにとってもポジティブな影響をもたらす、つまり、周囲の障害理解と当事者の障害受容は密接な関係があるというのが先生の見解。泉先生は、こうした「障害理解」と「障害受容」の相乗効果に、多様性を尊重する意識が育つ鍵があると考えている。

障害への理解が深まる条件を データで突き止める

そうした姿勢を子どもたちに伝えるためには、親や教師といった周囲の大人の態度や意識が重要になるという。泉先生

のゼミでは、近くの小中学校を訪問し、障害のある子どもを含む児童・生徒たちと触れ合う時間を設けている。

「子どもたちはすぐに大人の真似をして、障害者とスムーズに接します。逆に大人たちのほうが、偏見から抜け出すのが難しいのかもしれない。子どもたちの障害者に対する態度や意識は、経験によって大きく変わります。一緒に遊んだり、勉強をしたり、生活を共にすることで、両者の障害理解・障害受容の度合いは変化するはず。そんな仮説を立て、障害者と健常者が一緒に過ごした経験の量と質を客観的に評価するなどして、数量的データをもとにしたアプローチに取り組んでいる最中です」

障害にもさまざまな種類があり、環境要因もそれぞれのケースで異なるため、従来はケーススタディやインタビューなどの質的研究が中心だった。しかし、より多くの教育現場に応用できる再現性の高い知見を得るためには、どうしてもデータによる客観的な分析が必要になる。泉先生は、神奈川県内の小中学校に協力を仰ぎ、アンケートを実施。障害受容と障害理解の促進に必要な要素を、定量的にも突き止めようとしている。

多分野の専門家と力を合わせ インクルーシブな社会の実現へ

泉先生の研究の独自性は、これだけに留まらない。子どもの教育や発達を支援する際に、さまざまな分野の専門家による多職種連携を重視している点も、先生ならではの方針と言える。

「教育現場で起きている問題はつねに複雑です。特別支援教育からのアプローチだけでは乗り越えられない壁が確実にあります。医療、福祉、行政といった子どもの支援に直接関わる分野だけでなく、科学技術や情報技術の力を活用することも、今後は不可欠になるでしょう」

テクノロジーの力を借りて、多様な人々が共生するためのインクルーシブ（包摂的）な社会や教育を実現する。こうした研究を進めていく上で、ひとつのキャンパスにさまざまな専門分野の研究者が集まる横浜国立大学の環境は、非常に恵まれているという。

「現在も、工学研究院の先生方と一緒に、電子白杖をはじめとした新たな障害支援ツールの開発に取り組んでいます。分野の枠を超えた連携によって、障害や国籍など、さまざまに異なる背景を持った子どもたちが、同じ学校や地域で共に育つことを支援する。そんな社会を、まずはこの横浜から実現していきたいです」

PROFILE

静岡県清水市（現静岡市）出身。専門は特別支援教育、インクルーシブ教育。学生時代は生物学を専攻していたものの、途中で心理学へと興味に移る。大学院では発達臨床心理学の分野で、がん治療の過程で子どもたちに起こる心理的・認知的な変化を研究。横浜国立大学着任後に、障害や病気のある子供たちが地域の学校で学ぶ上での困難を目の当たりにし、現在のテーマにたどり着いた。

3 KEYWORDS

泉先生をひもとく3つのキーワード

1



学生自身の興味や意志を一番に。

学生たちには、自分のやりたいことを自分で見つけて追究するように指導。「傍からみたら無意味に思えるテーマだったとしても、意味ある研究になるようバックアップします」と泉先生。写真は、2018年度卒研発表会でゼミ生たちと。

2



学外の研究機関にも積極的に参加。

教育や医療、福祉といったさまざまな分野の専門家が集い、研究・研修を推進する「日本育療学会」。第23回の学術集会是横浜国立大学が会場となり、泉先生が大会長を務めた。ゼミ生や修士生たちも、スタッフとして手伝い。

3



愛娘直筆の絵が、研究室の癒やし。

お子さんから「誕生日プレゼント、何が欲しい？」と聞かれると、必ず「絵が欲しい！」と答えていたそう。幼少期の絵や工作も、今でも大切に保管しているという。無機質になりがちな研究室に、ささやかな癒やしをもたらしている。

世界的にも例のない独自の大規模調査で 国際市場における企業の為替戦略を解明。

大学院国際社会科学研究院 教授

佐藤 清隆

Kiyotaka Sato

*Your Efforts
will not betray you.*



YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

企業の為替戦略を研究対象とする 難しさと面白さ

複雑な要因が絡み合い、日々変化する外国為替市場。経済学者たちは、そこで生じるさまざまな課題の解明に取り組んできた。なかでも、佐藤先生がテーマとするのは、為替レートの変動と企業の為替戦略だ。日本企業がこれまでどのように為替リスクに対処してきたのかを明らかにすべく、今日まで研究を続けてきた。

「日本経済は、大幅な為替レートの変動を絶えず経験してきました。1971年には1ドル＝360円でしたが、1995年には1ドル＝80円を割り込むまでに円高になりました。同じ商品を輸出しても、得られる円は4分の1以下にまで減ってしまったのです。その後も、為替レートは大きな変動を続けています」

なぜ為替レートの変動によって企業は為替リスクを負うのだろうか。それを理解する鍵は、企業の貿易における建値通貨選択にある。

「為替レート変動による為替リスクを回避するためには、海外企業との取引でドルを使わず、すべて円建てにすればいいはず。しかし、日本企業は他国と比較しても圧倒的にドル建てでの取引が多かった。なぜわざわざ為替リスクを負う建値通貨の選択を行うのか、というのが大学院時代の研究テーマでした」

とはいえ、博士論文執筆後はこのテーマから離れてしまったという。その理由

はデータが入手できなかったためだ。企業がどの通貨で取引を行ったかについての情報は、企業の財務戦略に関わる重要事項。そのため、外部からのアクセスは難しい。実証研究を行うためのデータの入手は困難で、一度は研究テーマを変更せざるを得なかったという。

大規模な調査を通じて 独自のデータベースを構築

転機となったのは、2005年に経済産業研究所の研究プロジェクトに加わったこと。経済産業省の後押しが得られたことで、企業への訪問調査が可能になった。さらに2009年には、日本の輸出企業900社以上にアンケート調査を実施。独自に収集したデータに基づき、企業の為替戦略の実態に迫った。

「先進国向けの輸出で外貨を用いるのは、競争が激しい現地市場での販売価格を安定させるためです。また、世界各国に生産・販売拠点を展開している大企業の場合は、効率的に為替リスクを管理するため、グループ企業間の取引をドル建てで統一する傾向があります。企業のこうした為替戦略の結果、ドル建て輸出が多くなっているのです」

ほかにも、それまで学界では知られていなかった重要な知見がいくつも得られたという。佐藤先生はその後も調査を拡大して、2010年には海外現地法人1万7000社以上にアンケート調査を実施。以後4年ごとに大規模な調査を繰り返し、現在では、世界でも類を見ない大規模なデータベースを独自に構築している。

研究成果を国内外に発信し ビジネスの世界に還元

海外の政策担当者や企業に向けて、自らの知見を伝えたいという思いから、研究成果をまとめた著書『Managing Currency Risk (為替リスク管理)』は英語で出版された。

「アジア諸国は厳格な為替管理を徐々に緩和し、より柔軟に為替変動を許容する方向へとシフトしています。為替レートの大きな変動に絶えず直面してきた日本企業の為替リスク管理手法は、これらの国々だけでなく先進国にも有益な情報になるのではないかと考えています」

目を向けるのは国外だけではない。企業へのインタビューを行うなかで、日本国内にも情報を求めている企業の方々や政策担当者が数多くいることに気づいたそうだ。

「同じ業種の企業同士であれば、お互いの為替リスク管理の方法を把握しているかもしれません。しかし、他の業種の企業がどのように管理しているのかということまで、情報を持っている企業は多くありません。日本語で研究成果を出版することで、国内の企業にも我々の知見を伝えられればと考えています」

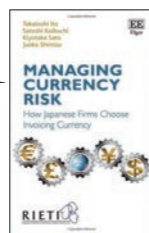
PROFILE

長崎県長崎市出身。専門は国際金融。横浜国立大学経済学部を卒業後、東京大学で博士号(経済学)を取得。翌年に横浜国立大学経済学部に戻り、助教授、准教授、教授を経て、現在は国際社会科学研究院教授。2018年に研究成果をまとめた『Managing Currency Risk: How Japanese Firms Choose Invoicing Currency』(共著)を出版、2019年には同書で、経済学分野で国内で最も権威ある「日経・経済図書文化賞」(第62回)を受賞。

3 KEYWORDS

佐藤先生をひもとく3つのキーワード

1



第62回「日経・経済図書文化賞」受賞。10年以上にわたる研究の成果をまとめた著書での受賞。英語で書かれた書籍ながら、国内でも高く評価された。授業や演習にも、同書の研究内容を活用している。為替に限らず国際金融の分野に興味のある学生は、佐藤先生の授業を履修しよう。

2



国際学会の重責を担う。査読付の国際学術雑誌「Asian Economic Journal」などのエディターや国際カンファレンスの主催も務めるなど、いまや経済学を世界的にリードする立場。写真は、中国社会科学院の国際ワークショップにて撮影した一枚。

3



国内外で活躍するゼミ生たち。学生・大学院生への研究指導にも定評がある佐藤先生。大学院の修士生の中には、「国際通貨基金(IMF)」や「世界銀行(World Bank)」のエコノミスト、海外の大学で研究者として活躍している人も。留学生が数多く集まることも特徴。

日常生活のサポートから思い出づくりまで、 「105」が目指す留学生支援のかたち。

留学生をサポートする学生団体「105 (いちまるご)」の室長、森原さんは「勉強も遊びも毎日全力」がモットー。あまり考え込まずに、即決断・即行動で物事に取り組むという彼は現在、留学生と一般学生との交流の場づくりに力を入れている。その活動の魅力を聞いてみた。

経済学部経済学科 GBEEP 2年

森原 佳大



大切なのは、 語学力よりも熱意と積極性

——「105」の活動内容を教えてください。
留学生の生活を全般的にサポートしています。レポートの手伝いやサークルの紹介、日本人学生と交流できるイベントの開催など、学生生活の手助けが中心です。とはいえ、日本に来たばかりの留学生には、日常生活でもわからないことがたくさんあります。たとえば先日は、銀行口座が作れずに困っている留学生の代わりに、口座開設の問い合わせをしました。活動内容ははじめから限定せずに、些細な困りごとでもフォローする。それが「105」のスタンスです。

——スタッフとして参加しているのは、 どんな学生たちですか？

意外に思われるかもしれませんが、英語が得意な学生ばかりではありません。共通しているのは熱意と行動力ですね。「留学生と友達になりたい！コミュニケーションしたい！」という思いの強い人が集まっています。メンバーを見ていると、カタコトの英語でも意欲さえあれば意思疎通はできると実感します。

——活動の頻度はどの程度でしょう？
部活やサークルと違って、「105」には決まった活動日がありません。サークルやアルバイトで忙しいメンバーもいますが、それぞれが自分のペースで「105」の活動時間を大切にしてくれています。

参加者 200 人規模の大きなイベントを準備する時などは、主体的に動いてくれるメンバーに助けられていますね。

メンバー増加に伴い、 組織づくりを意識するように

——運営メンバーは全部で何名ぐらいいるのでしょうか。

現在活動しているのは、大体 40 人くらいでしょうか。グローバルな意識を持った学生が年々増えてきていることもあり、メンバー希望者が増えているので、昨年から組織としての体制づくりを模索しています。告知を担当する広報部、資金管理をする会計部など、役割に応じた部局をいくつか作り、全体で顔を合わせずとも各自で動けるような形を整えました。最近も新たに 4 つの部局が新設されるなど、まだ試行錯誤の段階です。私は室長（代表）の立場なので、組織がスムーズに活動できるよう、全体をマネジメントする役割を担っています。

——責任の重いポジションだと、苦勞も 多いのでは？

11月に開催した合宿イベントの「アステージキャンプ」では、宿泊先の手配や当日の段取りなど重要事項がいくつかあり、何かあったら自分の責任というのはプレッシャーでした。でもイベント後に参加者から「ありがとう」と言葉をかけてもらったことで、それまでの苦勞が吹き飛びました。

メンバーを引っ張り 交流の企画を増やす

——活動を通じて、自分自身が成長したと
感じるのはどんなところですか？

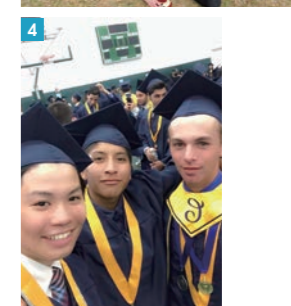
チームを動かす力、でしょうか。活動を始めた当初は、率先して動くことあまり、自分の意見にこだわりすぎてしまうこともありましたが、それでは組織がうまく回らないことを痛感します。ただメンバーを引っ張ろうとするのではなく、相互に意見を交わしながら物事を進めることが大事だと、この時に学びました。思い出したのは、当時受講していた「経営行動科学」や「組織論」での学びです。それまで座学にあまり興味が持てませんでした。この授業でのケーススタディは自分の状況とも重なっていて、多くのヒントが得られました。

——最後に、読者の方々へのメッセージ をいただけますか？

横国の留学生に限らず、日本にくる外国人の方々みんなに共通して言えるのは、「日本に興味があるからここまでやって来ている」ということです。日本人と話したいという気持ちをみんな持っていますし、話しかけられて嫌な顔をする人はいません。国際交流をしてみたい人、語学力を伸ばしたい人はぜひ留学生に話しかけてみてください。フレンドリーな彼ら、彼女らに関わることで、そこからきっと何かが生まれるはずです。

「105」の名前の由来。

2001年から活動を開始した「105」。2015年まで、国際教育センターの105号室を拠点に活動していたため、それがそのまま団体名となった。現在は2階ロビーを拠点としている。



1 「105」の活動拠点である国際教育センターで、留学生と談笑する森原さん。 2 異文化交流のためのイベントを企画するミーティング。 3 毎年2回、春と秋に開催している、1泊2日の「アステージキャンプ」。 4 高校時代を過ごしたアメリカの現地校。写真は卒業式での一枚。

アニメに惹かれて東欧から日本へ。 寮友と過ごす日々で、世界は広がっていく。

さまざまな国籍の学生が集う「常盤台インターナショナルレジデンス」で暮らすヤドヴィガさん。
アニメ好きが高じて、東欧はベラルーシよりやってきた留学生の彼女にとって、
横浜国立大学で過ごしたこの1年間は、どのような日々だったのだろうか。

経営学部経営学科

Kandratsenkava Yadviga



始まりはアニメ そこから世界が広がった

— 留学先として日本を選んだのはなぜですか？

子どものころから「ポケットモンスター」や「セーラームーン」が大好きで、アニメを通じて日本を知りました。そこからだんだんと日本文化にのめり込み、村上春樹や芥川龍之介といった作家たちに興味を持ったのをきっかけに、本格的に日本語の勉強を始めたのを覚えています。留学するかどうかはずっと迷っていましたが、友達の誘いもあり、留学プログラムへの応募を決心。文化の中心地である東京の近くに住みたいという思いから、関東近郊の大学を検討し、最終的に横浜国立大学を選びました。

— アニメ以外の日本文化にも興味を持っているのですか？

はい！ 神社に温泉、カラオケと、当たり前ですが日本には日本特有のものがたくさんあるので楽しいですね。あとは空手が大好きです。ベラルーシにいたころから極真空手を習っていて、今でも週に1、2回は道場へ通っています。ちなみに、空手を始めたのも『はじめの一歩』がきっかけなんです(笑)。最近「日本語上級」の授業で自分史を作ったのですが、そこで改めて、アニメが自分に与えた影響の大きさを実感しました。

学生寮の仲間たちに 支えられながら。

— 日本での学生生活には慣れましたか？

1年過ごしてだいぶ慣れてきましたが、勉強は正直大変で、ついていくのに必死な授業もあります。ただ、勉強で困っても周りの友達が助けてくれるので、環境には恵まれていると思います。人見知りな性格もあり、最初こそ周囲とどう交流すればいいかわからず戸惑いましたが、学校側のサポートが手厚かったおかげで、比較的すぐに馴染めました。全学生の約10%が留学生ということもあり、交流イベントも豊富で助かります。

— 常盤台インターナショナルレジデンスでの生活はどのようなですか？

とても満足しています。キャンパス内にあるので授業に出るのも楽ですし、セキュリティもしっかりしています。トイレトペーパーが備え付けなのも嬉しいですね(笑)。私が住んでいるのは、共用部を6人で共有する「シェアユニットタイプ」。最初は個室のほうが良いなと思っていましたが、実際に住んでみると、ルームメイトがみんな優しい！ それぞれ学部は違うのですが、宿題を教えてくれたり、話し相手になってくれたりと、いつもお世話になっています。とはいえ、プライベートスペースもしっかり確保されているので、ひとりの時間も大事にできるのも嬉しいです。

— 一緒に生活している人は、みんな留学生ですか？

日本人の学生も2人います。あとはタイとイタリアからの留学生です。誰かの誕生日やイベントごとがあると、みんなで集まってパーティをすることも。この前はタイの留学生の誕生日パーティーをしました。キッチンも広いので、料理もみんなで一緒にできて楽しいですね。

芽生えた経営への興味 いつかは起業にも挑戦したい

— どの授業が一番楽しいですか？

会社経営に興味があるので、「経営組織論」や「経営戦略論」の授業には力が入ります。横浜国大OBの起業家がゲストでやってくる「ベンチャーから学ぶマネジメント」も、起業に関するリアルな声が聞けてとても面白いです。この前は、VTuber「キズナアイ」の運営に携わる方が講演してくださり、アニメ文化好きの私としてはたまりませんでした。

— 今後の学生生活でチャレンジしたいことはありますか？

外資系企業でインターンシップをしてみたいです。いつか起業したいという野心があるので、大学で経営学を学びながら、インターンで経験を積めたら理想ですね。卒業後も日本で働きたいので、海外出身というルーツを活かせるよう、学びを深めていきたいです。

ともに暮らし、ともに学び、
ともに成長する。

キャンパス内に位置する学生寮「常盤台インターナショナルレジデンス」。人種や国籍、年齢、性別、信仰、障がいの有無にとらわれず、個性や文化の違いを認め合える共生寮を目指している。留学生だけでなく、日本人学生も在寮。



1 ルームメイトの誕生日会の様子。リビングやキッチンは寮の共用スペース。 2 日本での大会出場を目指し、日々空手の稽古に励んでいる。 3 日本の作家に興味を持ち、13歳の時に『北海道警察ロシア課』を購入。他にも、マンガやロシア語訳の村上春樹、芥川龍之介などを愛読している。 4 関西へ旅行した時に撮影した、姫路城の写真。

MY MEMORY

YNU PEOPLE
VENTURE SPIRIT

ヨココク歴史ものがたり

第4話 白亜の殿堂

遅いなあ みっちい…

ハナコ!!

みっちいっ!!

バス行っちゃったよ どうしたの? いつも時間だけは正確なのに

どうしたのって 待ち合わせ場所よ!! 「たじりつねお像前」ってどこよ!!

あ、わかりにくかった?

てか、今小さく 変ったよね?

わかりにくいわっ! で、これは誰なのよっ!?

はいっ!! 新入生!!

破天荒な発想で この学校の基礎づくりをした 偉大な先生だ!

経済学部の先輩かなあ

うん、なんかの講義で見たことあるかも

田尻常雄先生は 経済学部・経営学部の前身となる 横浜高等商業学校（大正12年設置）の 初代校長先生だぞ!!

ヤマダタケル（4年）が 君たちの先輩として 田尻先生について 話をきかせて あげようではないか

では、次のバスを 待つ間…

はい、提案でーす!

先輩のお話の続きは 中央図書館のカフェ 「shoca.」にて おうかがいするってのは どうでしょうかー

なぜなら そこに パン&ジュエリーズが あるから!!

時は大正 12年12月…

田尻常雄先生は 急遽赴任のため 列車にて上京する

そして、その車窓から 目にしたものは 同年9月に発生した 関東大震災の 生々しい爪痕だった…

横浜の街には急造のバラックが建ち並び 人々は震災の後片付けにいそしんでいた そんな光景を見て、田尻先生は決意したんだ

この惨禍は 絶対に再び 繰り返しては ならない

鉄筋コンクリートの 耐震耐火構造の 校舎を建設 するべきだ!

でも、 その時代の校舎は ほとんどが 木造ですよ

その通り。この常識破りな 田尻先生の発想は、なかなか 理解されなかったんだ

しかし、田尻先生は 諦めなかった…

そんな状況の中 何ヶ月もの間 反対する人々を 説得し続けたらしい

横浜百年の計からみても、 横浜の国際港たる 地位から考えても、 堅牢、毅然たる学びの館を 建設するべきです!

文部省

創学スタッフ

予算書に変更を 加えるなんて…

あっ! 横浜が きた!!

またか!!

て、鉄筋 コンクリート!?



そして、その熱意が
人々の心を動かしはじめ……

学生たちが安心して
通える学び舎を作りましょう！



急を要しない建物の建築を
先延ばしにすることで予算を確保する
という妙案を得て……

横浜の今の環境からみて
田尻の言うのが
至当かもしれんな

予算も
何とかやり
そうぞうし

大正15年3月
清水ヶ丘の地に鉄筋コンクリート3階建ての
新校舎が完成したんだ

陽射しを受けて白く輝くコンクリートの表面
ガラス窓をうがったストライプの黒い影
美しいシンメトリーをなす威容は
「白亜の殿堂」と呼ばれた



その出現の裏には
仮住まいを忍んだ
教職員や、1・2回生の
労苦もあった



そんなに綺麗な校舎
わたしも一度見てみたかったなあ

昭和49年8月に
キャンパスは
清水ヶ丘から
この場所へ
移転してきた
んだ



その当時はもう
風雨にさらされ続け
空襲の傷跡も残る校舎は
灰色にくすんでしまっていた

移転が始まる直前には
多くの卒業生たちが集い
「白亜の殿堂」の名残を
惜しんだという



そのなかには
前年まで校長を
務めていた
越村信三郎先生の
姿もあったんだって



越村先生は学生時代から
この校舎に通い続け
学生時代には応援歌
「輝く白亜」を作詞した

応援歌「輝く白亜」
輝く白亜 桂樹を洩る
緑を浴びて集へる我等
あゝ あゝ その胸にY・C・C
金色の希望に映ゆる
若き日の象徴を
勝利と共に賛美せよ
男の子 永久に 永久に
作詩 越村信三郎(高商4)



卒業生たちの思い出が
たくさん詰まって
いたんですねえ……



あ、ヤバい
そろそろ
バスの時間だわ

建築学棟の
近くのバス停
から乗ろう

え、なんで
建築学棟?

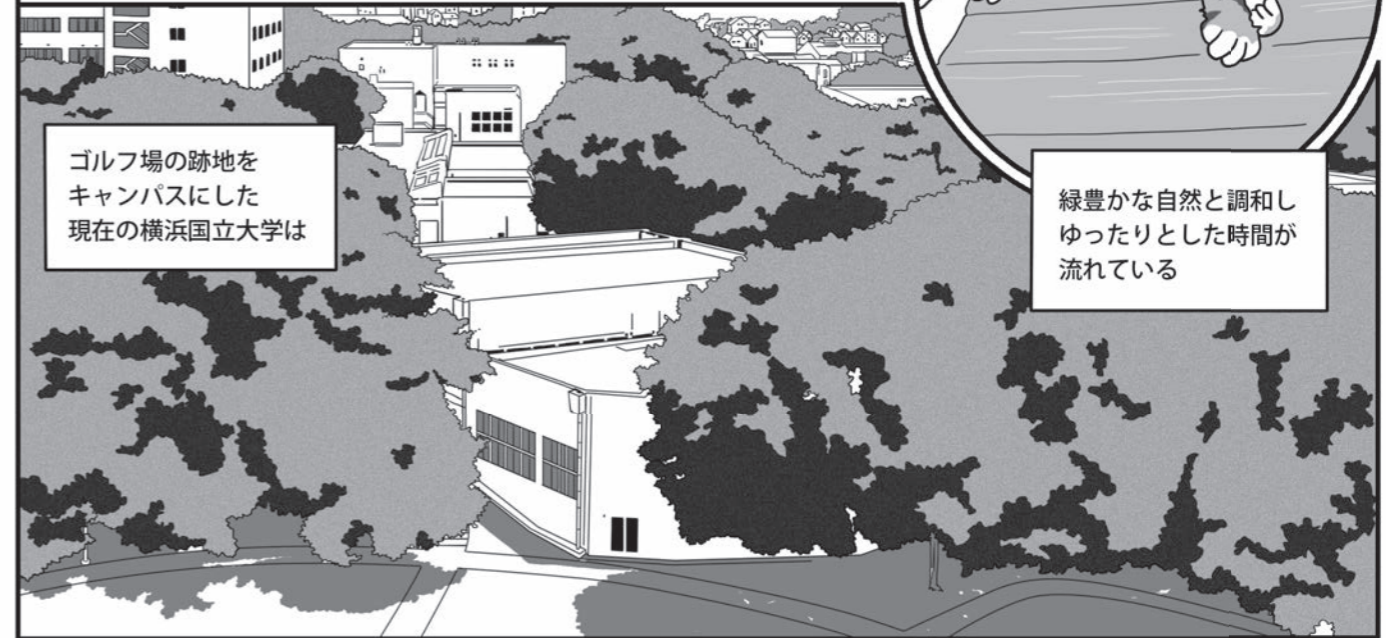
きみたち
よければLONE
を……

なぜなら
そこに猫様が
いらっしやる
からあ!

ヤダーセンパイ
ナンバ? ナンバ?
歴史講釈ナンバ?



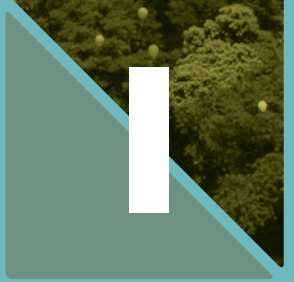
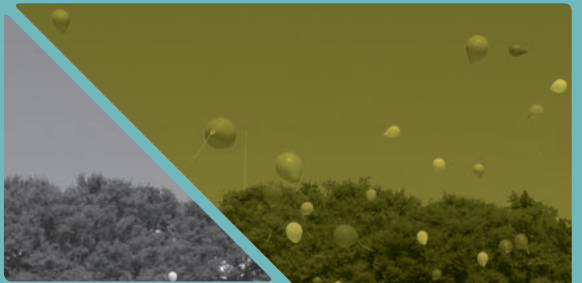
さくらにゃん



ゴルフ場の跡地を
キャンパスにした
現在の横浜国立大学は

緑豊かな自然と調和し
ゆったりとした時間が
流れている

YNU
FES



Y

趣向を凝らした料理やステージ企画。
最後は色とりどりの風船が空を舞う。

毎年5月に開催され、70～80の団体が参加する「清陵祭」。さまざまな屋台が出店し、メインストリートではダンスパフォーマンスが繰り広げられるなど、キャンパス内は大賑わい。中央広場のステージでは、サークルやバンドがパフォーマンスを披露する。締めくくりにバルーンリリースでは、カラフルな風船が空を埋め尽くす。

2020年5月16～17日開催予定

YNU
FES

O

T

横浜国立大学

常盤祭

K

I

A

W

子どもから大人まで楽しめるお祭り、
毎年大盛況のステージ企画も。

約140の団体が参加する「常盤祭」は、毎年秋に開催。広大なキャンパスが、さまざまな装飾で彩られる。スタンプラリーやサイエンスラボといった、趣向を凝らした出しものが並ぶ「図書館企画」は子どもたちにも大人気。芸能人やアイドルグループを招いて行う中央広場でのステージ企画も、毎年の目玉となっている。

2020年10月31日～11月2日開催予定

